

週日の説教

金 大烈 神父 2010年7月30日(金)

《正しいことは正しい -嫌いな人でも善い行いは認めましょう-》

説教に入る前に、聖書の勉強を一つしましょう。

今日の福音(マタイ 13・54 58)では、故郷の人々がイエス様のことをどのように言いましたか？
「この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、」その次が問題ですね。「兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。」と言っていますね。

私達は、『イエス様は一人っ子』と教えられ、それを固く信じていますね。しかし新教(プロテスタント)では、この箇所を見て、マリア様の童貞性を疑っています。イエス様に兄弟がたくさんいる、と書いてあるのはどういうことなのでしょう。皆さまはどのように教えてもらいましたか。もし「マタイの福音書には、“イエス様に兄弟がたくさんいる、姉妹もいる”と書いてあるが、どういうことなのか。」と聞かれたら、皆様はどのように答えますか。「知りません」と答えますか。それとも「私はそのように教えてもらいました。だから、そのまま信じています。」と答えますか。

じつはこれは、習慣、文化の問題なのです。ユダヤ人は、親戚全体を、特にいところを『兄弟姉妹』と呼んでいました。たとえば、一人っ子でも父親の兄弟の子どもがいれば、兄弟姉妹になります。ですから、この福音の中の『兄弟、姉妹』は、「同じ母親から生まれた人々」という狭い意味ではないのです。これは歴史的に判明されているし、今でもイスラエル人は、そのような意味で「兄弟姉妹」という言葉を使います。そして、同じユダヤ人同士ならば、会う時には必ず「兄弟！」という呼びかけをします。そのような習慣が、昔からユダヤにはあったのです。ですから、もし先ほどのような質問を受けたら、そのように親切に教えてあげてください。

私達は、教理で信じている通り、母であるマリア様が処女を守ったまま天に昇られた、というマリア様に対する美しい信心を守るべきだと思います。

さあ、今日の福音では、イエス様が故郷に帰られ、他のところでなさったのと同じように会堂で教えられましたね。そして、その教えに耳を傾けたふるさとの人々の反応は、ある意味では、当然の反応だったかもしれません。今日の福音を読んで考えなければならないのは、「ふるさとの人々が見せたこの反応は、私達人間の弱さをよく表しているのではないか」ということです。たとえば、自分の気に入らない人が善いことをしようとする時、私達の弱さはその人を応援する気持ちを押しえます。自分の本当に嫌っている人が、何か善いことをしたとします。その時、その人に温かい応援の拍手や激励の拍手をするべきです。しかし、隣の人がするから仕方なく手をたたきだけで、「ああ、本当に上手にできた。」「本当によくやった。」という心をこめた反応を見せるのは難しいでしょう。皆様、認めますか。認めなければなりません。

しかし、今日の福音を読んで私達は反省しなければなりません。自分の気に入らない人がしたことでも、客観的に見て善いことだと思ったら、心をこめて拍手を送るべきです。それが正しい人格ではないかと思います。そして、それが自分らしく生きることにもなります。しかし本当に小さな感情の働きによって、正しさを拒んでしまうことがあります。そういう間違いを私達はよくしているのではないのでしょうか。

どのような理由があったとしても、正しいことは正しいのです。そしてその相手の人にも機会を与えてください。本当に気に入らない人、倫理的にも道徳的にも批判された人が、頑張ろうとする姿を見せたとします。その時、「私も後ろから応援するから、頑張ってください。」という広い心を見せることができれば、私達は幸せな人と言われるのではないのでしょうか。

イエス様もそのような人間の弱い心によって傷つけられました。だから、今日の福音に「**そこではあまり奇跡をなさらなかった。**」と書いてあるのです。つまり、イエス様も心を痛められたのでしょう。私たちもそのようなことを自分のことと考えて、今日の福音を考えるとよいと思います。

ありがとうございました。